

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM

MUSE

2021.9
Vol. 39

帝国データバンク史料館だより [ミューズ]

■テーマ展示特集

明治時代の銀行番付

「京浜銀行番附」にみる銀行全盛期

■輝業家交差点 近代につぼんを彩る人物往来

初代 長瀬 富郎

優良国産石鹼の創製 一正道を求めて日本の清浄文化の礎の一端を築く一

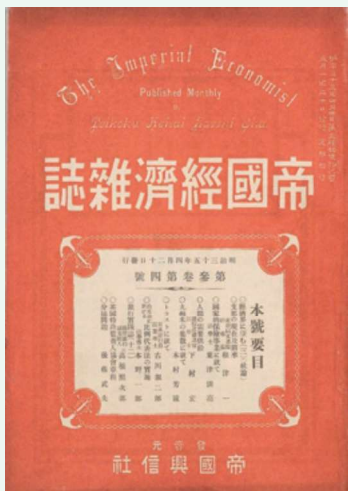
■資料にみる企業の歴史

『日本永代蔵』にみる江戸時代の倒産

「京浜銀行番附」について

1902(明治35)年に帝国興信社から発行された「京浜銀行番附」は、東京府と神奈川県所在の銀行すべてを一覧にした見立番付です。発行の理由には「取引銀行の信用如何を知らずして、漫然取引を開始したる結果、失敗蹉跌を招きたるもの甚だ夥し、我等深く茲に憾あり、簡にして且便なる方法により銀行信用の程度を拉し来り、之を取引者の前に致さん」とし、番付の発行が「公益に資する」と同時に銀行に益するものであると謳っています。番付を作成するにあたって、資金運用方法の良否、重役信用の厚薄、資本金・積立金の多寡、配当率、行員品行の良否、顧客に対する扱振、株券の時価などあらゆる側面から銀行の信用程度を調査し、一覧化しています。この番付は、『帝国経済雑誌』※2の付録として発行され、帝国興信社の会員(顧客)及び『帝国経済雑誌』の購読者に配布されました。

刊行年は帝国興信社創業の2年後にあたり、非常に早い段階で銀行の信用情報を会員に提供していたことがわかります。銀行の概要を収録した『帝国銀行会社要録』(現『帝国データバンク会社年鑑』)は1912(大正元)年に創刊していますが、その10年も前からこのような取り組みが行われていました。



興信所が発行した銀行番付

今回の展示では帝国興信所(社)が作成した番付をいくつか紹介していますが、創業者の後藤武夫が相撲好きであったことも番付が多い理由の一つかもしれません。社内報に掲載された年間優良社員の番付などがそのよい例です。

「京浜銀行番附」の構成をみると、相撲用語がバリエーション豊かに用いられています。後見・行事・勸進元、横綱～前頭などの番付にも使われている用語ですが、三役・座頭・別格・差添人などの細かな設定には番付へのこだわりが感じられます。また、京浜地域の銀行を網羅し、これほど詳細で正確な番付は現在のところ他に例を見ません。番付の判断基準に信用情報を用いている点が、興信所発行ならではの大きな特色です。

ちなみに、本番付は「日本実業史博物館旧蔵資料」に収録されていた資料です。日本実業史博物館は渋沢栄一の遺徳を顕彰するために計画された博物館で、その構想は頓挫しますが、展示用に蒐集した資料群が「日本実業史博物館旧蔵資料」とし

て国文学研究資料館に残されています。資料群の「番付の部」には、本番付の他長者番付などが含まれ、蒐集当時から経済関連の番付が実業史に関わる重要な資料として認識されていたことがうかがえます。

銀行全盛期を伝える記録

「京浜銀行番附」には計293行の銀行が掲載されており、そのうち54行が貯蓄銀行、4行が外国銀行です。19世紀末にかけて銀行設立が相次ぎ、1901年に普通銀行数はピークを迎えました。その翌年に作成された本番付は、銀行全盛期の状況を伝える貴重な記録です。

番付を見渡すと、中央部分の惣後見に大きく日本銀行が鎮座し、両脇に現在のみずほ銀行の前身である日本勧業銀行と第一銀行、及び横濱正金銀行が並びます。当時の五大銀行について見ると、三井銀行は行司、三菱合資会社銀行部は横綱、大阪に本店を置く住友銀行は東京支店が差添人、安田銀行は勸進元、第一銀行は惣後見と、それぞれが主な役職に名を連ねています。

番付の最下段には「貯蓄銀行の部」が設けられています。当時の日本では、貯蓄または貯金を零細な預金として銀行預金と区別していました。そのため普通銀行とは別に専門の貯蓄銀行が設立されました。1880年に最初の専門貯蓄銀行として設立された東京貯蔵銀行が貯蓄銀行の横綱に位置付けられています。貯蓄銀行は1900年代初頭をピークにその後普通銀行へと転換・合併し、戦後には完全に姿を消します。普通銀行も統合により、現在はほとんどその姿を残していません。銀行全盛期の姿を伝える本番付は、銀行の変遷史と併せることで、より多くの情報を読み取ることができます。



大関 東京貯蓄銀行(渋沢史料館所蔵)

貯蓄銀行の部	
横綱 東京貯蔵銀行	△日本橋區南町二丁目一〇番地 ●三十三萬圓 ○本一〇萬圓
大関 東京貯蓄銀行	△浪二町四丁目一〇番地 ●三萬九千圓 ○百四十五圓
關脇 横濱貯蓄銀行	△横濱市南仲通二丁目一〇番地 ●五萬九千圓 ○一五圓
	△東京支店四丁目一〇番地 ●八萬八千圓 ○一五圓

京浜銀行番附(貯蓄銀行部分)

- ※1 株式会社帝国データバンクは、1900(明治33)年3月3日に帝国興信社として創業し、2年後に帝国興信所と改称しました。1981年より現在の社名に至ります。
- ※2 『帝国経済雑誌』は、創業当初より帝国興信社が発行していた経済情報誌『商海時報』を1902年1月より改題したもので、創業間もない帝国興信社を支える収益の大きな柱となっていました。

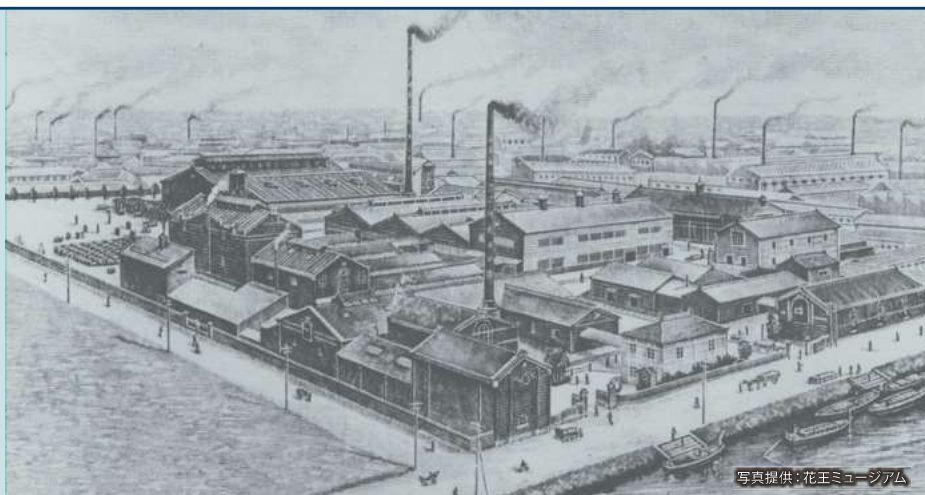
帝国データバンク史料館 テーマ展示
マネー番付大集合!
—「全国金満家大番附」を読み解く—
会期: 2021/9/7 ~ 2022/3/4(予定)

今回紹介した銀行番付の他、さまざまなマネー番付を紹介します。特に長者番付に焦点を当て、その歴史を紹介すると共に帝国興信所が調査を手掛けた「全国金満家大番附」をデータ化し、分析します。1929年と1934年、計6,605人の富豪データを資産額や業種、居住地などの切り口で読み解きます。展示会場にてマネー番付の世界をお楽しみください。

※現在、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休館しております。開館状況・ご予約はホームページをご覧ください。



初代長瀬 富郎 (1863-1911)



写真提供：花王ミュージアム

優良国産石鹼の創製

— 正道を求めて日本の清浄文化の礎の一端を築く —

|| 生い立ちと上京

近代日本の経営発展を振り返ると、洗浄と衛生そして美容に資する製品の創製と普及に努めた企業家たちがいた。現在の花王を創業した初代長瀬富郎も、その1人である。2009(平成21)年まで台所や食卓に置かれた「エコナ」のネーミングは、**Edible Coconut Oil of Nagase**(長瀬の食用椰子油)に由来する。初代富郎の嗣子・2代富郎の時代の1928(昭和3)年3月に業務用に発売された商品名が、1990(平成2)年に内容を一新して復活したものであり、「エコナ」の「ナ」に長瀬の名を残している。

初代長瀬富郎は、1863(文久3)年11月21日、美濃の国・恵那郡福岡村に、農業と酒造業(現在でも「鯨波」の恵那酒造として知られる)を営む長瀬栄蔵の次男として生まれ、幼名を富二郎といった。偶然にも、ライオンの創業者の初代小林富次郎と同音異字である。富二郎は、11歳の時から母の実家で塩や荒物を商う若松屋に奉公に上がった。熱心な働きぶりが認められ、20歳の時には支店の副支配人にまでなる。富二郎は、仕事を通じて商品流通の実際を学び、米相場や銀相場などの経済情報にも接した。歴史や古典の一般書のほかに、『会社弁講釈』なども読んで将来像を展望するようになる。

副支配人を1年半務めた後、富二郎は円満退店し、1885(明治18)年9月、四日市港から横浜港を経て東京に入った。独立の志を抱いてのことである。同年同月、郵便汽船三菱と共同運輸の激しい競争の末、両社が合併して日本郵船が誕生した。富二郎は、折しも競争で船賃が安くなっていたので海路を選んだのである。

|| 投機の失敗と長瀬商店の開業

日本橋蛸殻町に入った富二郎は、独立資金をつくろうと米の相場取引を始めた。少額で取引を始め、当初は利益を得たが、その後、見込み違いの売買で無一文となる。病も重なったが、郷里の人々からの

救済を得て、体力と気力を回復していった。

翌1886(明治19)年の1月、富二郎は、日本橋馬喰町の洋小間物商、伊能喜一郎商店に入店した。伊能忠敬の一族といわれる主人の店である。入店にあたって、富二郎は、馬喰町内の口利きといわれた秋田太吉の世話になる。秋田は老齢であったが、男伊達のある人物で、蛸殻町での富二郎の気っ風に注目していたのである。

洋小間物商というのは、鉛筆、インキ、消しゴムといった西洋文具のほか、石鹼や石鹼入れ、歯磨き粉、香水など、当時の新しい輸入品を広範に扱う店である。横浜などの居留地で外国人を顧客としていたが、新時代を象徴する商品への需要が見込まれ、日本橋の間屋街に扱う店が徐々に現れていった。

富二郎は、伊能商店でも仕事ぶりを認められ、短期間のうちに支配人となる。馬喰町の商店街でも、その名を知られる存在となっていった。この頃から、富二郎ではなく富郎と書簡に署名するようになっていく(以下、富二郎を富郎とする)。しかしながら、富郎は、独立の志やみがたく、1年半で店を辞めていったん帰郷する。

郷里で3ヶ月間の準備を整えて再び上京した富郎は、1887年6月19日、馬喰町2丁目の通称板新道に、洋小間物商・長瀬商店を開業した。24歳のときである。当初は兄弟のように育った2歳年長の叔父と共同経営であったが、開業から20日ほど経ってその叔父が帰郷したので、長瀬商店は富郎の単独経営となった。

|| 「花王石鹼」の創製と発売

初期の長瀬商店も、石鹼や石鹼入れ、西洋文房具などの卸売りや小売りを兼ねていた。石鹼はアメリカのコルゲート社の「^{パニー}蜂印石鹼」が主であり、国産石鹼は洗顔をすると皮膚を痛める代物が多かったため、鳴春舎などの良質な製品を仕入れて販売した。この鳴春舎は、ライオンの創業者小林富次郎も一時経営に携わった工場である。1889(明治22)年5月17日、富郎は、馬喰町1丁目の表通りに店舗を移した。翌

1890年4月から上野で第3回内国勲業博覧会が開かれた。そこで出品された国産石鹸への低い評価を知ったことで、富郎は優良な国産石鹸創製への思いを駆り立てられる。

伊能商店時代に面識のあった石鹸職人の村田亀太郎が、この年の2月に新宿旭町に石鹸工場を創業していた。そこで、村田に石鹸生地の製造を依頼した。そして1890年10月に、富郎は「花王石鹸」を発売したのである。「顔洗い」すなわち顔の洗える国産の優良石鹸という思いから「かお」にこだわり、「花王」と命名された。なお、村田亀太郎は1910年秋のライオン石鹸工場の創設にも関わってゆく。

「花王石鹸」の創製にあたり、富郎は同郷の薬剤師である瀬戸末吉に学びながら必要な化学的知識を習得し、香料や薬剤の調合などの方法を研究していた。花王石鹸発売時も香料と色素の調合だけは、富郎自身の手によった。その後も、調合済みのものが荷造りされて、毎日、長瀬商店から村田工場へ送り届けられたのである。



タブレット状の「花王石鹸」は、まず紙で包まれ、能書きや証明書を印刷した紙で巻き、3個ずつ桐箱に収められた。能書きには、薬効を示す文言のほか、高峰讓吉博士の分析試験の結果も添付され、桐箱には、漢詩人で書家の永坂石埭が「花王石鹸」と書き下した紙1枚が貼られた。このように凝った包装は、白粉や高級歯磨き用

の包装を模したもので、国産の石鹸としては初めてのことであった。価格は、桐箱入り3個35銭、1個12銭であった。輸入石鹸の「蜂印石鹸」で1ダース28銭、国産品で1ダース約10銭で、「花王石鹸」とほぼ同時期に発売された「さくら石鹸」(芝町町の鈴木安五郎製造・発売)や「三能石鹸」(銀座の佐々木玄兵衛商店発売、現在も艶出しふきんの「つやふきん」で知られる喫煙用品店)が1個10銭であったので、いづれよりも高い価格であった。かけそば1杯1銭、米5kgで23銭であったから、日用の必需品というより高価な高級化粧品であった。優良な国産石鹸創出という富郎の思いは、発売5年後に大阪で開催された内国勲業博覧会での有功2等賞受賞と、宮内庁御買上の栄誉に浴することで結実していった。

マーケティング活動と商品の品揃え

「花王石鹸」が発売された年、東京と横浜で電話が開通した。前年には新橋・神戸間に東海道線が全通し、東日本と西日本の往来が便利になった。静岡の千代鍛冶(1871年開業、現在の中央物産に合併)などはすでに年3回4日ほどかけて仕入のために上京していたが、やがて長崎の成宮商店(1869年創業)や下関の夏川本店(1902年創業)など遠方の商人も上京するようになった。この2店は、西日本の広域卸サンビックを経て現在の全国卸あらたとなっている。富郎は、「花王石鹸」発売と同時に大阪の大崎組を関西総代理店とした。大崎組は、現在のマンダムの前身である。さらに各地有力店との取引を増やす一方、薬屋系統の店も特約店とし、陸海軍や病院など大口需要先の開拓にも努めた。

富郎は、広告・宣伝活動にも力を入れた。最も利用したのは新聞広告(全国紙・地方紙)であり、鉄道沿線には野立^{のぼり}広告も設置した。さらに、劇場の引き幕広告、四谷見附での広告塔の設置、電柱広告、隅田川の川蒸気船の屋根の広告、浴場の広告、浴場への浮き温度計の配布など、多様な広告・宣伝を展開していった。こうして富郎は、「花王石鹸」をナショナル・ブランドに成長させていったのである。

「花王石鹸」発売の翌年には、瀬戸末吉の薬品調合の技術を利用して、歯磨き粉の「寿考散」を発売し、その翌年には、共同事業で製造した蝋燭も発売した。その2年後には、「寿考散」に代わる新商品として「鹿印煉歯磨」を発売した。蝋燭の販売によって、荒物系統の販路も開拓されることとなった。「鹿印煉歯磨」は、イギリスからの注文もあるほど高評であった。1900(明治33)年12月には、化粧水の「二八水」を発売した。2×8=16で16歳の娘盛りをイメージした商品名であった。

事業の発展と遺訓

主力製品の「花王石鹸」の売上伸張にともない、1896(明治29)年4月に村田工場を本所区向島須崎に移転して生産設備を拡充し、その6年後の1902年には向島の請地に新工場を竣工した。この頃、2人の弟が富郎を補佐するようになった。1人は販売部門を担当する祐三郎で、もう1人は工場部門の支配人となる常一である。

富郎は、やがて業界の諸活動への参加や問題の解決を求められるようになった。その疲労も重なって、1911年10月26日、ついに不帰の人となった。享年48歳であった。亡くなる前の同年7月9日、富郎は、家族・親族を集めた新築祝いの場で、遺言書を読み上げた。遺言書には、「人は幸運ならざれば非常の立身は至難と知るべし、運は則ち天祐なり、天祐は常に道を正して待つべし、總て何事も順序を誤るべからず」(『初代長瀬富郎伝』280頁)と記されている。富郎自身の失敗や情熱を傾けた革新的活動から導き出された言葉である。「天祐は常に道を正して待つべし」は、現在の花王の企業理念である「花王ウェイ」にも、「正道を歩む」として進化的に継承されている。



上：請地工場での仕上げ作業
下：1896年の新年新聞広告

『日本永代蔵』にみる江戸時代の倒産

資料にみる企業の歴史

江戸時代、分散(倒産)は特にめずらしいことではありませんでした。しかし、分散の数や頻度には地域差があり、頻度の高い地域もあれば、10年に1件ほどしか発生しない地域もありました。一方、戯曲や川柳など江戸の文学作品の中には分散という言葉が頻繁に登場します。八百屋お七を題材にした歌舞伎「伊達娘恋緋鹿子」※1に出てくる「今時のこの世界、夜ぬけ(夜逃げ)と分散せぬ者は男の内じゃござりませぬ」という台詞からは、分散が当時の人々にとって身近な存在であったことがうかがえます。今回は江戸時代の人々が分散をどのように捉えていたのが、当時の文学作品から読み解きます。

多数の債権者に買収立てられる債務者
〔善悪角力勝負録〕、国立国会図書館デジタルライブラリー

⊕ 債務者への制裁

分散は人々に身近な存在であると同時に、社会的な不名誉を伴う一大事でもありました。「町人の分散は武士の落城したも同然」※2と言う台詞からも、その深刻さがうかがえます。明治年間に司法省がまとめた『全国民事慣例類集』※3には、各地域の分散の慣習が記されています。債務者は債務を完済するまで、羽織や下駄の着用、家名を名乗ること、雨傘の使用禁止など、さまざまな行動上の制限を課されました。また、河原小屋への居住や他所への転居を強制されるなど居住地の制限、村政への参加権の剥奪、村民との同席の禁止、宗門人別帳に「沽却人」(分散者)と記載され他と区別されるなど、他の村民より一段低い扱いを受け、差別的な扱いを伴うこともありました。このように分散した債務者に厳しい制裁を伴う地域がある一方で、債務の返済以外特に何も制裁のない地域も多くあり、これらの慣習にも地域差がありました。

⊕ 『日本永代蔵』のなかの分散事例

貞享5(1688)年に刊行された日本初の経済小説といわれる浮世草子『日本永代蔵』※4で井原西鶴は、分散の事例をいくつか取り上げ、批評しています。



『日本永代蔵』巻6
京都大学附属図書館蔵

事例1 良心的な分散

「たとへば、借銀かきみ、次第にふりにつまり、さまざま調義をするになりがたく、自然とその家をつぶし、毛頭内証に偽りなく、委細に勘定を立て、その上の分散は損銀するに悪まず。」(『日本永代蔵』巻6-4)

このように、借金がかさんであれこれ工夫をしてもどうしようもなくつぶれてしまい、隠し事や偽りなく詳細に勘定をしたうえで分散は仕方がないとし、良心的な分散として評価しています。また、理想的とされる分散の一例として、伊豆屋の分散を取り上げています。

事例2 理想的な分散

「むかし難波江の小島に伊豆屋といへる手前者、自然と倒れ、正直の首をさげて詫言して、財宝渡して六分半あり。」
「残る三分半は、いつでも仕合せ次第に済ますべし」と、
結構づくにたち退きて、生国伊豆の大島に行きて、
親類を頼み日夜に世をかせぎ、一たび元のごとくと、
思ひこみし所存より大分まうけて、二たび大坂にのぼり、
あつて過ぎたる分散の残り銀、ことごとく済ましぬ。」(『日本永代蔵』巻3-4)

大坂の江の子島で商いを営んでいた伊豆屋という資産家が、自然と分散し、各債権者に正直に頭を下げて謝罪をして廻り、当時の分散の配当は4割もあればよいところ※5 6割半を配当しました。「残り3割半の債務もいつか都合のつき次第返済します」と申し分なく片づけ、故郷の伊豆大島の親類を頼って日夜働き、もう一度元の状態に戻りたいとの一念で大分儲けたため、再び大坂に戻り、返さなくてもよい残りの債務も17年後に完済しました。

「それよりは十七年すぎぬれば、国遠して知れぬ人もあり。この分の銀は太神宮へ御初尾(伊勢神宮へのお賽銭)にあげ、又、六、七人も死にうせて子孫のなき人の銀は、高野山に石塔を切つて借錢塚と名付け、その跡をとむらひける。かかる人、前代ためしなき事なり。」(同上)

債務を完済するまでの間に行方がわからなくなってしまった債権者への返済分は伊勢神宮へお賽銭として納め、死に絶えて子孫もない債権者も6、7人いましたが、高野山に借錢塚を建てて吊ったといえます。西鶴も伊豆屋のような事例は前代未聞のことと述べており、極めて稀なケースであったと思われます。

悪心的な計画倒産

良心的とされる倒産があれば、その逆もまた然り。『日本永代蔵』には、現在でいう計画倒産に該当する事例も取り上げられています。計画倒産は、計画的に詐取しようという意思を持って会社を設立して倒産を迎えることであり、詐欺の一種です。江戸時代にも搾取を目的とした計画的な分散は存在し、それほどめづらしいことではなかったようです。

“ぶんさんの 済む内夫婦 木綿もの”（読み人知らず）という川柳があります。債務者夫婦が分散の一連の手続きが完了するまで、質素な木綿の着物で過ごしている様子が詠まれています。一見、分散後の様子を詠んだ何のひねりもない句ですが、この分散には計画倒産の匂いが漂います。

その理由を、『日本永代蔵』に描かれた具体的な計画倒産の手口から見えていきましょう。

事例3 計画的な財産隠し

「おのれがかせぎは疎略して、居宅を奇麗に作り、朝夕酒宴・美食を好み、衣類、腰の物を拵へ、分際に過ぎたる人付会、傾城狂ひ・野郎遊び、尻も結ばぬ糸のごとく、針を蔵に積みても溜らぬ内証、人の物を見せかけにて借り込み、これを済ますべき分別なし。これは我と覚えての仕業、手を出して昼盗人より悪し。」（『日本永代蔵』巻3-4）

自らの商売はいい加減にして、住まいを豪勢に造り、朝から晩まで酒宴と美食を好み、着物や脇差を拵えて、分際に過ぎた交際をし、遊女狂いや野郎遊びにふけり、（尻も結ばぬ糸のごとく）浪費して、（針を蔵に積んでも溜らないように）減る一方の財産でありながら、豪勢な見せかけによって人の物を借り込み、返済するつもりもない。これを最初から踏み倒すつもりでやっているのだから、自分で手を動かす空き巣狙いよりも性質が悪い、と非難しています。続けて、

「末々一度は倒るるつもりに、五、七年も前より覚悟して、弟を別家に仕分けて、分散にこれを遁されし、京の者は伏見に名代を替へては屋敷をもとめ置き、大坂の者は在郷の親類に田舎を買はせ置きぬ。身の置所を先へ、跡の虚殻を借錢の方へ渡して、古帳枕にして横に寝てかかるこそうたてけれ。町衆扱ひにかかり、年分にその家を立てんといへば、かへつてこれを迷惑がりて、外聞は灰まで渡し住家を立ちのき、三月の節句を心安く桃の酒を祝へり。」（同上）

5〜7年も前から一度は分散するつもりで、弟に財産を分けて別家させ、京都の者は伏見に他人名義で屋敷を購入し、大坂の者は田舎の親戚に田畑を買わせておくなど我が身の財産を確保したうえで、残りの抜け殻のような家財を返済金に当て、大福帳を枕に寝ている態度こそ憎らしい。町内の人々が調停に入って、年賦払いで家が建つようにしようと提案しても、かえってこれを迷惑がって、表向きは竈の灰まで債権者に引渡して住まいを立ち退き、3月の桃の節句をのんびりと祝っている。

以上が、計画倒産の一連のあらましです。分散を意図的に計画し、見せかけで人の物を借り込む手口は、まさに現在の計画倒産そのものです。偽装による財産分与や財産を他人名義にするなどの財産隠しも、現在にも共通した手法です。

事例4

したたかな手口

「今時の商人、おのれが身代に应ぜざる奢りを、皆人の物にて昼夜を明かし、大年の暮におどろき、工みてたふるる拵へして、世間の見せかけよく、隣を買ひ添へ軒をつづけ、町の衆を舟遊びにさそひ、（中略）松茸・大和柿のはじめを、値段にかまはず見世のはしにて買ひ取り、茶の湯は出来ねど口切前に露地をつくり、久七に明暮たき土をさせて、奥深に金屏をひからし、外よりこのもしがらせ、やがて売家なるに千年も住むやうに思はせ、（中略）、人の物借らるる程は取り込み、ひそかに田地を買ひ置き、一生の身業を拵へ、その外、子どもを仕付銀まで取りて置き」（『日本永代蔵』巻6-4）

他人のお金で身分不相応の贅沢をし、暮らしぶりを豪勢に見せかけてお金を借り込み、密かに土地財産を確保したうえで分散するという手口は前の事例と共通していますが、贅沢ぶりや分散の手口の描写はより詳細です。近所の人々を舟遊びに招待し、松茸や大和柿などの初物を値段に構わず買い取るなどの贅沢、隣家を買ひ取り家の間口を広げ、露地（茶室の庭）やたき土間を作り、金屏風をしつらえて、いずれは売ってしまうのに千年も住むように見せかけ、お金を借り込むその裏では、一生の財産を蓄え、そのうえ子供の教育費（仕付銀）まで確保するというしたたかさが描かれています。

「惣高算用して三分半にまはる程に仕かけ、負せ方にわたしけるにのちは我人たいくつして、おのづからに済まし、その当座はかなしき顔つきして、木綿着物にて通りしが、はやこの寒さわすれて、風をいとはぬかさね小袖、雨ふつて地かたまると、長柄のさしかけ傘に竹杖のもつたいらしく、むらさきの頭巾して、「小判は売りしゆんか」と相場聞など、さながらのけ銀のやうに思はれける。さてもおそろしの世や、うかとかし銀ならず、仲人まかせに娘もやられず、念を入れてさへ損銀おほし。」（同上）

すべて計算して配当金が3割半程度で済むように分散し、お互いほぼりも冷めてきた頃に、重ね小袖に傘、竹杖をもち、紫頭巾を被って「小判は今が売り時か」と相場を尋ねる様子は実に憎々しげです。「のけ銀」（隠し財産）の存在を隠すそぶりもありません。分散してからしばらくの間は「かなしき顔つきして、木綿着物にて」過ごす様子が描かれており、この部分は前に挙げた川柳“ぶんさんの 済む内夫婦 木綿もの”の描写と一致します。そのため、この川柳は一見普通の分散の様子を描いた句と見せかけて、実は計画倒産をした夫婦がほとぼりが冷めるまで神妙に過ごしている様子を皮肉った句として読むことができるのではないのでしょうか。

西鶴が「さてもおそろしの世や」と嘆く計画倒産が横行する状況は、現在にも当てはまります。「念を入れてさへ損銀おほし」、気をつけていても損をするのは多々あり、うかうかと取引をしてはいけないう戒めは、現在にも通じる教訓です。

※1 土田衛他編『菅野助全集 第二巻』（勁誠社、1991年）
※2 「傾城盛衰記」古典叢書 柳亭種彦集II 第十一巻（本邦書籍株式会社、1990年）
※3 生田精編『全国民事慣例類集』（司法省、1880年）
※4 校注・訳者谷脇理史他『新編日本古典文学全集68 井原西鶴集③』（小学館、1996年）
※5 現在の弁済率（配当）の多くは1割を切る
【参考】
・中田薫著、宮武外骨編『徳川時代の文学と私法』（成光館出版、1930年）

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM

MUSE | 2021.9 Vol.39



〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

- [入館料] 無料
- [開館時間] 10:00～16:30 (入館は16:00まで)
- [休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始
(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

- [JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分
中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分
- [地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分
丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し付けください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

www.tdb-muse.jp

